

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』における日英比較対象

—英語翻訳の相違点—

The Comparisons of Japanese and English in *Ginga Tetsudo no Yoru* by Kenji Miyazawa

— The Differences among English translations —

新 妻 明 子

NIIZUMA Akiko

キーワード：日英比較対照、翻訳研究、銀河鉄道の夜、翻訳比較

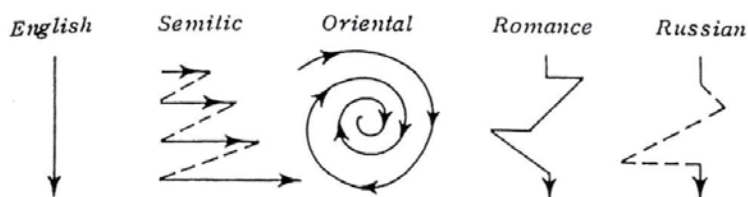
Keywords: a comparison of Japanese and English, translation studies,
Ginga Tetsudo no Yoru, a comparison of several translations

抄録：

本稿では、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の日本語と英語で翻訳されたものを比較対照し、さらに複数の英語翻訳を比較することによって、どのように語彙を選択し表現しているのか、詳しく分析することを目的とする。対照修辞学の視点からの分析とは異なり、語彙単位で作品を通して事例分析を行うことによって何が明確になるのか示すことができるかどうか試してみるとともに、翻訳研究と何か関連性を見出すことができるのかという点についても探してみたい。また、4つの英語翻訳を比較していく過程において、ロジャー・パルバースの翻訳には他には見られない特徴的な表現が使用されており、なぜそのような表現を選択したのか興味深く感じる点がいくつもあった。そこで、パルバース訳に焦点を当て、どのような意図や解釈が反映されているのかを解明することを試みる。その上で、今後、対照修辞学と翻訳研究についての関連性を探っていくために必要な課題を探る。

1. はじめに

Connor (1996), Kaplan (1966) によると、それぞれの言語には異なる修辞構造があるとされる。Kaplan は、約 600 名のアメリカで勉強する外国人留学生の英作文を分析し、日本語に限らず外国人が書いた英作文には、母語の思考パターンを反映した特徴があると指摘した。また、世界各言語の論理構造のパターン（図 1）を示し、語順や思考の順序は、各言語に特有で特徴的なものであるという考え方を広めた。このモデルは、英語中心主義的なことや、あまりに単純化されたモデルであることで批判も多く浴びた。Kaplan (1966) で示された論理展開パターンは、あくまでも一つの指標に過ぎないと言えるが、このような対照修辞学の視点を踏まえた上で翻訳研究との関連性を探ることは重要である。



Kaplan (1996:15)

【図 1】世界各言語の論理展開のパターン

しかし、新妻・小野田（2015）の中で文学作品の翻訳研究によってこのような対照修辞学との関連性を探ろうと試みたところ、同じ英語でも訳者によってかなり異なる語彙や文体を用いていることがわかった。翻訳においてどのような語彙を選択するかという問題は、言語の違いだけでなく個人の解釈によるところが大きいと思われる。そのため、対照修辞学の視点から分析したとしても、言語間だけでなく訳者間で異なる点についてどのように分析すべきかが疑問であり課題でもある。

本稿では、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』における日本語と英語を比較し、その中でも物語のキーワードや核となる部分の語彙や表現に関して特に翻訳者によって表現が異なっている部分について取り上げ、複数の英訳も比較しながら分析することを試みる。

2. 「銀河」と「天の川」における英訳

はじめに、タイトルにも使われている「銀河」と、「天の川」という言葉における事例を見てみよう。何回か出てくるキーワードであるため、作者によって統一性を出しているのかと考えていたが、実際はそうではない。まず、タイトルである「銀河鉄道の夜」をどのように訳しているか比較してみよう。事例に使用する英語訳は、次の A から D の訳者による 4 冊から引用し、以下、例文の引用元を便宜上 A ～ D の記号で表記する。なお、事例中の下線は筆者によるものである。

- A. John Bester (宮沢 (1992))
- B. Joseph Sigrist and D. M. Stroud (Miyazawa (2009))
- C. Roger Pulvers (宮沢 (1996))
- D. Sarah M. Strong and Karen Colligan-Taylor (宮沢 (2002))

(1) 銀河鉄道の夜

- A. Night Train to the Stars
- B. Milky Way Railroad
- C. Night On The Milky Way Train
- D. Night Of The Milky Way Railway

「銀河」という言葉に対して、Bester (宮沢 (1992)) 以外はすべて “Milky Way” で表している。A の Bester がなぜ単なる “the stars” という表現にしたのかは疑問が残る部分であるが、この後の表現では、次の例に示してあるように「銀河ステーション」という見出

し部分などで“Milky Way”を使用しているところもある。

(2) 銀河ステーション

A, B, C & D. Milky Way Station

一方で、C の Pulvers は一貫して“Milky Way”という表現を多用している。和英辞典等によると、「銀河」に対応する英語は“galaxy”という単語が最初に出てくるにもかかわらず、訳者の3人が「銀河鉄道」の「銀河」という日本語に“Milky Way”という語彙を使用しているのは、『銀河鉄道の夜』で列車が走るコースが北十字のあるはくちょう座からサウザンクロス駅のみなみじゅうじ座であり、日本で夏の夜空に見られるいわゆる「天の川」であるためではないかと考えられる。これは、「銀河ステーション」の英訳では共通して“Milky Way”を使用していることから当てはまるのではないだろうか。

現在では、英語の“Milky Way”も日本語の「天の川」も、文脈によって天球上の光の帯を指すこともあれば、天体としての「天の川銀河」を指すこともあると言われるが、英語の辞書による定義は次のとおりである。

(3) Milky Way

- a. the galaxy (= star system) that includes the earth, seen at night as a pale strip across the sky
- b. American English:
the pale strip of stars across the sky that forms part of the galaxy (= star system) that includes the earth

(Cambridge Dictionary)

- c. The Milky Way is the pale strip of light consisting of many stars that you can see stretched across the sky at night.
- d. British meaning:
 - 1. the diffuse band of light stretching across the night sky that consists of millions of faint stars, nebulae, etc, within our Galaxy
 - 2. another name for the Galaxy

- e. American meaning:
the spiral galaxy containing our sun: seen from the earth as a broad, faintly luminous band of stars and interstellar gas arching across the night sky, with the constellation Sagittarius marking the direction to its center

(Collins English Dictionary)

Cambridge Dictionary でも Collins English Dictionary でも、イギリス英語とアメリカ英語の両方の意味を区別して掲載しているが、両方の辞書を併せて見ると、「銀河系」という意味と、「多くの星が集まる青白く光る細長い地帯」という両方の意味があることがわかる。前述したように、文脈によってどちらの意味に解釈することもできるということである。ただし、日本語の意味を大辞泉で調べてみると、「銀河」の意味に「天の川」とあり、

百科事典マイペディアによると、「天の川」の定義は次のように書かれている。

(4) 天の川

銀河系の渦巻の縁辺が、地上からは天上を流れる川のように見えることからついた名。古代中国では漢水の気が天に上って銀河になったと考えて銀漢、河漢と呼び、日本に伝わって天河、天漢などの字が使われた。銀河を川に見立てることは世界の諸民族に共通してみられ、ギリシア神話では女神ヘラの乳がほとばしってできたといい、ガラクシアス（乳の川）と呼んだ。英語の Milky Way はこれに由来。

(百科事典マイペディア)

このことから、英語 “galaxy” は、ギリシア語でミルクを意味する “gala” から派生した “galaxias” を語源とすることがわかり、日本語の「天の川」や「銀河」という言葉では「乳」という意味合いは出てこないが、英語では “Milky Way” にも “galaxy” にも「乳」という意味が含まれているのである。その由来となったギリシア神話の女神ヘラの話は以下のとおりである。

(5) The Creation of Milky Way

Hera used to be in conflict with the semi-god and hero Heracles, since he happened to be the son of her husband Zeus and a mortal woman.

According to a myth, Zeus once brought the infant to Hera to suckle on her milk while she was asleep, but she suddenly woke up and pushed him away. The drops of the spurting milk created the Milky Way, the galaxy that contains the Solar System.

(Greek Gods Info.: Greek Goddess Hera)

全知全能の神ゼウスが赤ん坊にヘラのミルクを飲ませようとしたが、ヘラが突然目を覚まして赤ん坊を突き飛ばし、その時にほとばしり出たミルクが流れてミルクの川、つまり Milky Way を作ったという内容である。

語源からもわかるように、“Milky Way” も “galaxy” でも、それらが示している天体は同じであるが、“Milky Way” の方が川のように見える部分を指しているといえるであろう。その裏付けになると思われる次の文の英訳を見てみよう。

(6) 天の川がしらしらと南から北へ亘っている

- A. … the Milky Way stretching whitish from south to north, …
- B. … the brilliant white Milky Way stretching from south to north.
- C. … with the Milky Way, soft and blurry white, streaming from south to north.
- D. … the Milky Way stretching with a soft white light from south to north.

ここでは、「南から北へ亘っている」と描写されているため、川のような状態の無数の星が南から北へ延びているということを表現する “Milky Way” の方がふさわしい表現である

と理解できる。そのため、4人の訳者とも、ここでは“Milky Way”という言葉を選んでいる。

しかしながら、物語の冒頭で先生が天の川について説明をするシーンがあり、このシーンにおける語彙の選び方はそれぞれ異なっている。

(7) ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のそこの砂や砂利の粒にもあたるわけです。

- A. So if you see the River of Heaven as a real river, then each small star corresponds to a grain of sand or a piece of gravel on the riverbed.
- B. So, then, … If we think that this heavenly river is really a river, all of those little stars are like the sand and gravel in the riverbed.
- C. So, if we think of the Milky Way as the Celestial River, then each and every one of these tiny little stars may be seen to be a grain of sand or pebble on the bed of that river.
- D. And if we think of the so-called River of Heaven as an actual river, each one of those tiny stars would correspond to a grain of sand or bit of gravel on the river's bottom.

“River of Heaven”という表現から、「この天の川」を「あまのがわ」と読んだのではなく、「てんのかわ」と読んだため、「天」を“Heaven”と訳したのだと考えられる。CのPulversだけが一貫して“Milky Way”と表しているが、他の訳者には見られない“Celestial River”という語を使用していることも特徴的である。「天」をどのように訳すかという点において、“celestial bodies”で「天体」という語として使用される“celestial”を選び、「天の川を天空の川だと考えるのなら」と解釈し、上のように訳していることがわかる。他の訳者たちは、「ほんとうに川だと考えるのなら」という部分を、「ほんとうの川」だと解釈し、A. “a real river,” B. “really a river,” D. “an actual river”と訳しているため、CのPulversとは明らかに異なっている。

さらに、次の「銀河帯」という訳語においても、“Milky Way”をそのまま使用しているか、“galactic”と言葉を変えているかそれぞれ異なっていることがわかる。

(8) 白くけぶった銀河帯

- A. the smoky white part that stretched as a galactic band
- B. the whitish Milky Way zone
- C. the smoky white zone of the Milky Way
- D. the hazy white galactic sash

(7) でひとりだけ異なったCのPulversは依然として“Milky Way”という語で表現しており、ここでもまた一貫性が見られる。「銀河帯」の「帯」を、AのBesterは「ひも、帯状のもの」という意味の“band”、DのStrong and Colligan-Taylorは、衣類の「帯」である“sash”と訳しており比喩的な表現であるといえる。

「銀河」を表す表現にも違いがあることがわかったが、興味深いことに、次の文章中の「銀河鉄道」という表現にはすべて“Milky Way”という訳が使用されていた。

(9) 幻想第四次の銀河鉄道

- A. fourth dimension of fantasy that is the Milky Way Railway
- B. fantasy Fourth Dimension Milky Way Railroad
- C. Four-Dimensional-Milky-Way-Dream Train
- D. Milky Way Railway of the imperfect, illusory fourth dimension

A の Bester は、タイトルには“Night Train to the Stars”という訳を使用しているにもかかわらず、ここでは“Milky Way Railway”と訳していることがわかる。また、C の Pulvers が“Milky Way”を一貫して使用していることはここまでにも述べてきたが、ここで“Dream Train”と表現していることによって、これが夢であるという結末を暗示させてしまうように思われる。ここまで比較してきただけで、「銀河」という言葉も場面によって様々な英訳になっていることが明らかである。

さらに異なる場面を観察するために、物語の結末の場面での「銀河」について見てみよう。

(10) そう言いながら博士はまた、川下の銀河いっぱいにつつた方へじっと眼を送りました。

- A. And as he said so, he gazed intently at the place downstream where the river was filled with the reflection of the Milky Way.
- B. And the professor again looked off intently downstream, where the Milky Way glimmered brightly in the water.
- C. With those words Campanella's father gazed far downstream where the galaxy was part of the river itself.
- D. As he spoke the professor again shifted his gaze downstream to where the reflected image of the Milky Way filled the river.

ここでは逆に Pulvers だけが“the Milky Way”という表現を使っていないことがわかる。日本語では同じ「銀河」という言葉であるにもかかわらず、場面や訳者によってこれほどまでに選んでいる言葉が異なっているのは非常に興味深い。しかも、主観的な感情表現などではなく、「銀河」というものの名称であるため、それほど翻訳に違いがあるという事実は予想を超えていた。Pulvers が最後の場面を除いて“Milky Way”を一貫して使用していたのには理由があると考えるが、ここでは仮説に留めておく。しかし、“Milk”＝「乳」が物語の中で重要な意味を持ち、だからこそそれを暗示するような“Milky Way”の単語を多用していたとすれば、Pulvers も物語の展開における「乳」の意味を認識していたと考えられる。次の章で、その「乳」の持つ意味について詳しく述べたい。

3. 『銀河鉄道の夜』における「乳」の暗示する意味

3.1. 物語中の「牛乳」と「乳」

本章では、前章で見てきた「銀河」や「天の川」の英訳に“Milky Way”という言葉

選んだ点について、物語の中の「牛乳」が出てくる場面と関連付けて分析する。物語の中の「牛乳」について見てみると、「三、家」でジョバンニが病気の母親のために牛乳を取りに行くが、「四、ケンタウルス祭の夜」では、牛乳が受け取れないどころか邪険に扱われ、「九、ジョバンニの切符」の最後の文では、「早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りました。」と、最後の場面にも牛乳が登場し、牛乳の問題が解決しないまま物語が終わる。ここで、「銀河鉄道の夜」における「牛乳」とは何かを暗示しているのだろうか、という疑問を抱くことになるが、この「牛乳」が登場する前の、いちばん最初の文が次の文なのである。

- (11) ではみなさんは、そういうふうに川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのほんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか。

(宮沢賢治 (1996:8))

これは、先生が天の川について説明する場面であるが、その説明の中で再び「乳」の話が出てくる。

- (12) またこれを巨きな乳の流れと考えるならもっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。

(宮沢賢治 (1996:16))

この説明に出てくる「乳」は、物語の中での「牛乳」の伏線になっていると考えられ、言葉の響きから“milk”を結び付けやすい“Milky Way”という表現を使用したとすれば、日本語で「天の川」という言葉を使うよりも牛乳に込められた意味があるのではないかと感じるであろう。記者たちがそのような解釈をしていたかは不明であるが、廣瀬 (2013) によると、「乳」に関してより深く分析されている。

3. 2. 廣瀬 (2013) による分析

廣瀬 (2013) は宮沢賢治の菜食主義について非常に深く分析しており、さらにブログ「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の深層世界を探訪する」の中で「乳」について以下のように分析している。

- (13) 多義語としての「乳」

食物の名前が最初に出てくるのは、「一、午後の授業」の先生による、天の川を「乳」に例える説明です。これは「銀河」の英語 Milky Way に因んだものですが、銀河の構造を説明するために乳の化学の知識を使ったりもしています。いずれにしても、「一、午後の授業」に出てくる「乳」は銀河の仕組みに関わる内容で、食物としては扱われていませんが、のちの展開の伏線として使われていると思われます。

「銀河鉄道の夜」における「乳」の物語は、「菜食主義」、「親孝行」、「哺乳類の母子関係」といった多面的な問題を孕みつつ展開されていきます。

菜食主義と牛乳

「三、家」に出てくる唯一の動物性食物は牛乳です。宮沢賢治は【ビヂテリアン大祭の世界】で示したように、菜食主義者を動物性食物はすべて禁忌とする「絶対派」と生命体そのものでなければ動物性食物も可食とする「折衷派」に分けています。この点で牛乳は「絶対派」には禁忌だが「折衷派」には可食という、まさに菜食主義者にはボーダーにある食物の典型です。

親孝行と牛乳

いっぽう「銀河鉄道の夜」では、牛乳はジョバンニによって病気の母親に届けられる食物として描写されています。つまり、少年による親孝行の実践のためのツールとして、牛乳が使われていることになります。この「親孝行と牛乳」をめぐる物語には、それなりにシンパシーを感じさせるものがありますが、普通の母子関係からすると、乳の授受の方向が逆転している点が気になるところです。

乳と母性

なぜ気になるのか。それは「雁の童子」に「乳」を介した母子関係を描いた場面があるためです。「雁の童子」は、「父母の像」、「菜食主義」、「狩猟」、「いじめ」といったテーマが取り上げられている点で、「銀河鉄道の夜」の先駆的作品と言えるのですが、「乳」との関連では、母馬の乳を呑んでいる仔馬を、馬商人が引きはなそうとするのを見た童子が泣き出す場面が印象的に描かれています。つまり「乳」を介した哺乳類の本来の母子関係が、人間の都合で引き離されることを嘆く作者の思いが、この場面の描写に投影されたと見ることができるのです。

(廣瀬正明：宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の深層世界を探访する)

宮沢賢治作品における「菜食主義」のテーマは、『銀河鉄道の夜』だけでは不十分であるが、少なくとも最初と最後の文中に「乳」と「牛乳」が出てくる点に関しては、このように分析されている意味があると思われる。しかし、英語で“Milky Way”と繰り返し使用すると、日本語の本来の物語以上に“milk”と連想してしまうことも考えられ、また、訳者たちがどのように解釈しているかも不明確であるため、その真意については疑問が残る。

4. その他の名称

物語の中で、賢治が様々な名称にこだわりを持っているということが読みとれるが、本章ではその中でも特に、賢治の造語であると言われる「天気輪」と、ジョバンニに対するあだ名として描写されている「虫めがね君」について取り上げる。

4.1. 天気輪

「天気輪」とは結局何のことかという疑問については諸説があり、念仏車説であるという説もある。垣井由紀子は、天気輪の柱とは五輪塔から着想したものと推察している(西田良子編著(2003))。その根拠は、賢治が晩年、五輪峠からの風景を描いた詩「病技師〔二〕」で「五輪塔」を「天気輪」に推敲しているという事実である。

また、天気輪が仏教由来の建築物であることから、原子朗（1989）は、この表現は仏教由来の建造物（お天気柱、転法輪、車塔婆、後生車など）と関係があると述べ、柱の回転する輪は賢治の宗教観である輪廻思想のシンボルであろうと述べている。お天気柱とは、別名を地藏車、菩提車ともいい、東北地方における墓地や村境に見られ、農耕に恵みをもたらす天候を祈り、死者を弔う目的で設置された仏教的な宗教設備の一種である。形態的には、石や木製の柱の手の届く部分をくりぬいて、回転可能な輪を取り付けた形状をしており、祈祷者はこれを回して祈り願をかけるのである。

このように諸説がある語を英語ではどのように訳したのか、次の例を見てみよう。

(14) 天気輪

- A. the weather pole
- B. a pole
- C. the weather station
- D. the weather wheel

賢治は「天気輪の柱」と表現しており、それがジョバンニの後ろから「三角標の形」になり、最終的には「野原にまっすぐにすきっと立つ」、と変化していく様子が描写されている。それぞれの英訳から「天気輪の柱」の様子を想像すると、A. “the weather pole,” D. “the weather wheel” は実在しないため、同じように何を表しているのだろう、と想像力を働かせることになるが、B. “a pole” では単なる「柱」であるし、C. “the weather station” は天気を観測する機械を想像してしまうか、“station” という単語によって、それが物語の次の場面に登場する「駅」のことを暗示させてしまうと考えられる。このような特殊な語に関しても、翻訳者個人の解釈が優先されると思われるため、英語特有の概念が見られるということもないであろう。

4. 2. 虫めがね君

新妻・小野田（2015）で指摘しているように、「よう、虫めがね君、おはよう」という表現に出てくる「虫めがね君」は、その人の身につけているもの（部分）でその人物（全体）を表すメトニミーのひとつである。ジョバンニが活版印刷所で活字を拾う作業をするために、虫めがねのような眼鏡を身につけていたため、「虫めがね君」と呼ばれていると解釈できる。さらに、活字を拾う作業について、「粟粒ぐらいの活字」という表現が使われているが、これはルビのことを示すと考えられる。その理由として、昔の印刷物では、総ルビといってほとんど全部の漢字にふりがなをつけるのが普通であり、賢治の童話などでも、生前に出版されたものは総ルビのものが多かった。ジョバンニは子どもなので、大人相手の文章を活字で拾うのは難しかったと考えられ、子どもを使って「粟粒ぐらいの活字」の部分、つまりルビだけ拾わせていると推測される。したがって、まわりの大人からは「虫めがねくん」というあだ名をつけられていたと思われる。4人の英訳を見てみよう。

(15) よう、虫めがね君、お早う

- A. Hi there, Master Magnifying Glass!

- B. Hey, Bug-eyes! How're you doing?
- C. Hey, Three-Eyes!
- D. Need a magnifying glass there, Sonny?

D では“Sonny”（坊や）という呼びかけであり、あだ名で呼んでいることになっていいないが、ここでひとつ疑問点がある。Pulvers の訳した C. “Three-Eyes” とはいったいどういう意味なのだろう。Urban Dictionary によると、次のような意味が記載されていた。

- (16) a. 3-eyes: insult for someone wearing a monocle.
- b. Three-eyes: another word for dick head.

(16a) は、「片眼鏡をかけている人を侮辱して言うことば」という意味であり、もしジョバンニが活字を拾う作業中に片眼鏡をかけていたとすると、その様子をバカにしたように呼びかけていると解釈できる。また、(16b) は、「ばか、愚か者の別の呼び方」という意味であり、やはりジョバンニをバカにして呼んでいると解釈したことがわかる。この後に続く文で、「近くの四、五人の人たちが声もたてずにこっちも向かずに冷たくわらいました。」とあることから、この呼びかけに含まれているジョバンニに対する態度を考えると、Pulvers はそのような侮辱した様子を“Three-Eyes”と訳すことによって表したのではないかと考える。

5. ロジャー・パルバースのこだわり「どこまでも」

第4章までの英訳比較において、C の訳者である Pulvers（ロジャー・パルバース）は他の3人とは異なる解釈やこだわりを持っていると思われる点が多く見られた。本章では、「どこまでも」という表現を事例に挙げ、Pulvers 本人がこだわりを持って翻訳している事実について述べたい。

まず、次の文の「どこまでも」を見てみよう。

- (17) ああぼくはその中をどこまでも歩いてみたいと思ったりしてしばらくぼんやり立っていました。
 - A. …and thinking how he'd like to wander among them, on and on forever.
 - B. “Ah,” thought Giovanni, “how I'd like to walk through the sky and see.”
 - C. he thought, standing there in a daze…
 - Ah, I'd like nothing more than to travel inside there as far as a human could go!
 - D. He thought he would like to go walking on and on forever among them.

ここでも C の Pulvers だけが表記スタイルまで異なっており、「ぼくはその中をどこまでも歩いてみたい」という部分を心の中のセリフとして、文を分けて訳している。また、「どこまでも」に相当する表現として、“as far as human could go”（人間が行くことができるかぎり）と描写しているのも特徴的である。

「どこまでも」や「もうどこまでも」という表現は、宮沢賢治作品でよく使われており、『銀河鉄道の夜』の中にも何回か出てくるが、パルバース（2008）によると、次のように説明さ

れている。

- (18) 「どこまでも」とか、「もうどこまでも」は、英語の to[till] the ends of the earth（世界の果てまで）に相当すると思います。この to the ends of the earth は、「空間」「時間」両方の「果て」を表現します。ですから、これを使って、この『銀河鉄道の夜』の「どこまでもどこまでも一緒に行こう」を英訳すれば、こうなります。

I will stay with you till the ends of the earth.

（パルバース（2008:170））

三人の遭難者がサウザンクロスで降りたあと、ジョバンニとカンパネルラは二人きりになり、そこで二人は自分達のすべきことを自覚する。そのシーンで印象的なセリフにおける「どこまでも」を見てみよう。

- (19) どこまでもどこまでもいっしょに行こう。

- A. Let's go on together, on and on forever.
- B. Let's stick together all the way, whatever happens!
- C. Let's stay together till the ends of the earth, okay?
- D. Let's go on and on together forever.

ここでもまた、Pulvers だけが“till the ends of the earth”という表現を使用しており、前述のパルバース（2008）の解説にあるように、Pulvers 自身が自らの解釈に確信を持って使用している表現であるといえる。「どこまでもどこまでも」と2回繰り返す表現は賢治独特の表現であるといえるため、Pulvers 以外の訳者たちにも、A や D で“forever”（永遠に）や、B で“whatever happens”（どんなことが起こっても）という表現を付け加えるという工夫が見られるのが特徴的である。

Pulvers の翻訳だけがなぜ特徴的でこだわりを感じるのか。Pulvers は 1967 年に日本を初めて訪れ、ある大学教授に宮沢賢治を教えてもらったことをきっかけにして彼の作品を読み始めた。最初に読んだ作品が東北地方に伝わる民族学的な話である『ざしき童子のはなし』だったため、日本語にも日本文学にもほとんど無知だった当時の Pulvers にはほとんど理解できず、それがさらに宮沢賢治のことを知りたい、という気持ちをかき立てていった。そして、1969 年には賢治の故郷である花巻を訪れ、宮沢賢治の実弟である宮沢清六にも出会い、親しく付き合う仲になった。花巻を訪ねて賢治にさらに興味を持ち、『銀河鉄道の夜』の翻訳にとりかかり、それ以後何度も翻訳し直し、2011 年には 5 回目の翻訳がネットで出版された。実に 40 年以上もかけて、何度も翻訳を繰り返している。また、Pulvers は、自身の翻訳作業について次のように語っている。

- (20) ちなみに僕が作品を翻訳する際は、いつもトランス状態に入り込み、賢治になりきって「もし賢治が英語で書くとすれば、どんな文体を使い、どんな単語を選ぶだろう」と想像しながら訳しています。僕にとって翻訳という作業は、宮沢賢治を理解する一番の方

法になっているといってもいいでしょうね。翻訳しながら賢治の世界観を体得し、同時に英語に置き換えるという作業を行なうことで、僕自身の賢治観や日本観、自然観がにじみ出てくるのです。

(バルバース (2012:7-8))

Pulvers は、さらに、宮沢賢治の作品の中には、風、光、土、日、水、空気というエレメンツがひそんでいて、人間がその中で行動しているのであり、そのような発想を持って銀河鉄道の夜を分析すると分かりやすくなる、とも語っている。

このように、Pulvers は 40 年以上の年月と 5 回という翻訳回数を経て、宮沢賢治作品の世界観を自分の中に同化していくような作業を積み重ね、他の訳者たちには見られないような表現を生み出しているのである。

6. まとめ

本稿では、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の重要なキーワードとなる語、「銀河」、「天の川」、「天気輪」などを取り上げ、複数の英語翻訳を比較対照し、その中でも特に翻訳に特徴の見られる Pulvers 訳について焦点を当てた。紙面の都合上、取り上げられた語の種類や場面が限られてしまったが、4 作品の英語訳を比較することによって、語彙レベルでもかなり違いがあることが明らかになった。これは、冒頭で述べた言語による論理展開によるものではなく、物語を解釈する過程における訳者の解釈の違い、時には漢字の読み方や語彙理解の違いによるところが大きいと考えられる。訳者がどのように解釈したのかという事実については、英訳の表現から読み取ることはできず、Pulvers が自身の翻訳について解説しているように、訳者自身の解説がなければその真意はわからない。しかし、日本語と英語を比較対照することによって、どのような解釈や意図をもって言葉を選んでいるか、ある程度推測することが可能であるということを示すことができたのではないか。

さらに、『銀河鉄道の夜』という作品そのものが多様なテーマを含んでいるだけでなく、作者である宮沢賢治の晩年までの 10 年間、約 3 回（小さい改稿もみると約 7 回）の加筆・訂正・削除が行われながら、結局未完成のまま残された作品であるため、作者自身の意図や物語に込められたメッセージを正確に理解することは困難であり、多数の研究者たちがさまざまな解釈を提案している。そのような日本語を英語で翻訳する過程において、解釈の違いが生じるのは当然のことでもあるが、辞書通りの翻訳になると思われる語彙でさえ、場面や状況によって異なる表現が使用されている現象は興味深いといえる。英語は繰り返し同じ言葉を使用することを避ける傾向にあると言われているため、物語を通して言語表現を観察し、分析する必要があるが、この点については今後の課題としたい。

また、本稿では語彙レベルの比較対照にとどまってしまったため、論理構造にまで踏み込むことができなかったが、羽鳥（2006）では、日本語と英語の表現の違いとして、「日本語は情緒的で英語は論理的である」、「英語が論理的なのは、空間的な表現、科学的な表現などによく現れている」（羽鳥（2006:10-11））、などという点が指摘されており、論理構造上の違いについても分析していくことが必要であり、これについても今後の課題である。ひとつの作品をすべて分析するだけでなく、同一作者が複数の作品に渡って根底にしているテーマもあるため、比較対照として取り上げる事例の精選に関しても、その方法について理論的

に学んでいかなければならないだろう。

【引用文献】

- Connor, Ulla (1996). *Constructive Rhetoric*. Cambridge Applied Linguistics (CUP 1996)
- Kaplan, Rovert (1966). "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education." *Language Learning* 16, 1-20.
- 新妻明子・小野田貴夫 (2015). 『銀河鉄道の夜と Milky Way Railroad』 静岡：篠原印刷所.
- 西田良子編著 (2003). 『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』 pp.178-179. 大阪：創元社.
- 羽鳥博愛 (2006). 「日・英表現の違いの根底にあるものと違い調査のための分類案」、『日英語の比較—発想・背景・文化[第二版] 日英言語文化研究会編著. pp.9-14. 東京：三修社.
- 原子朗 (1989). 『宮沢賢治語彙辞典』東京書籍.
- 廣瀬正明 (2013). 『宮沢賢治「玄米四合」のストイシズム』 東京：朝文社.
- ロジャー・パルバース (上杉隼人訳) (2008). 『英語で読み解く賢治の世界』 岩波ジュニア新書 598 東京：岩波書店.
- ロジャー・パルバース (2012). 『NHK「100 分 de 名著」ブックス 宮沢賢治 銀河鉄道の夜』 東京：NHK 出版.

【ウェブサイト】

- Greek Gods Info. Greek Goddess Hera
< <http://www.greek-gods.info/greek-gods/hera/myths/hera-and-the-milky-way/> >
2018 年 10 月 7 日アクセス
- 廣瀬正明 (2017). 「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の深層世界を探訪する:16 多義語としての『乳』」
< <http://oryzajpn.com/archives/2658529.html> > 2018 年 9 月 6 日アクセス

【使用した翻訳本】

- Miyazawa, Kenji. (Sigrist, Joseph and D.M. Stroud.) (2009). *Milky Way Railroad*. Stone Bridge Press.
- 宮沢賢治 (ロジャー・パルバース訳) (1996). 『英語で読む銀河鉄道の夜』 筑摩書房
- 宮沢賢治 (ジョン・ベスター訳) (1992). 『銀河鉄道の夜 Night Train to the Stars』 講談社
- 宮沢賢治 (サラ・ストロング、カレン・コリガン - テーラー訳) (2002). 『Masterworks of Miyazawa Kenji「英文 宮沢賢治傑作選」』 サンマーク出版

